

随筆

鉄馬を駆ける

(株) 環境設計国建
宮城正和

普段の生活から非日常の体験をすることがストレスの解消になることは誰もが認めるところであろう。

東の空が明るくなり始めるころ、妻を起こさないようにそそくさと準備を始める。そこまで話すと誰もがゴルフと思うだろうが、私の場合は少し違うのである。着古したジーパンに革ジャンを羽織り、その上に更に革のベストを重ね、つま先のとがったブーツで身を固め、ヘルメットとサングラス、グローブを抱えて寝室を出る。1階の車庫のシャッターを開けるのだが、それが難儀である。週末の早朝という家族の生活を考えるとシャッターを出来るだけゆっくりと音を立てずに開けなければならないからだ。自分では静かに開けたつもりでも、家族は皆、音で目が覚めてしまうのである。車庫のシャッターを開けて、鉄馬（ハーレー ダビットソン）を車庫から出すのであるが、それが重労働であるのだ。なにせ乾燥重量で400kg（総重量500kg）を超えるのだからエンジンを掛けずに車体を動かすことがいかに大変であるか経験がないとわからないだろう。1994年型 FLHTCU（ウルトラ バックギヤー付）1340cc ブルーの巨体は朝日に照らされ見事な風貌を現す。自宅の前でエンジンを掛ければラクなのだが、何せエンジンを掛けると爆音がすごいので自宅から少し離れたところまで移動してエンジンを掛けなければならないのだ。やはりエンジン音はでかい。チョークを引き、イグニッションモーターを回すとビッグツインが目覚ます。「ドッ、ドッ、ドッ、ドッ…」スロットルは開けずにアイドリング状態であるが、まるで生き物のように徐々に回転数が上がってくる。回転数が上がると同時に、逆にチョークレバーを戻していく。この時点でチョークを戻すとエンジンはすぐに停止してしまうので、しばらくは回転数を見ながらチョークを調整していく。暖気運転は10分くらい必要だろう。しばらくするとエンジンも落ちついて回転数も安定してくる。かなり近所迷惑だが、そろそろ目的地に向かって移動しなければならない。アイドリングと違って巨体を動かすにはスロットルを開けて走り出すのだからかなりの爆音となるが、その頃には本人の耳は慣れており、あまりうるさいとは思わないのだから誠に勝手なものである。



ちが待つパークレーズコートに向かう。1994年型ウルトラはキャブの最後の世代である。95年からはインジェクションエンジンに変わるので扱いはラクであるが、キャブレター独特の息吹（キャブ独特の吸気音）が無いのであまり好きではない。パークレーズコートに着くとまだ誰も来てない。しばらくは使い古したタオルを持って車体を拭きながら、うっとり車体を眺めて自己満足しているのである。しばらくすると、遠くから爆音が聞こえてくる。エンジン音で誰が来るのかはすぐにわかる。ソフテイルに乗った開業医のO先生が来たのだ。70歳を目前にしているがアメリカ大陸を単独でバイクで横断するほど元気である。その次に来たのがデイトレーダーでサーファーのロードキングに乗ったN君、最後に勤務医で内科医のダイナに乗ったK先生だ。

全員が集まったところで、最年長のO先生が中心になって今日のルートと所要時間や食事の場所などを決めた後、O先生を先頭に出発する。その次はK先生、N君と続き、最後はウルトラに乗った私だ。ずいぶん長い付き合いだが、その順番はほとんど変わらない。パークレーズコートを出るとすぐに西原インターから自動車道に入り、宜野座インターで自動車道を降りる。宜野座インターを出ると国道329号を北に向かう。仕事で乗用車に乗っている時とはまるで景色が違うものだ。からだ全体で風を受け、その土地の臭いを感じながら走っているとまるで宙に浮いているかのような錯覚にさえなるのである。宜野座から329号を北上し、辺戸岬まで行くルートには適当なコーナーがあり、ツーリングには最適なルートである。2輪車に乗ったことのある人は解ると思うが、2輪車はコーナーになるとハンドルを切るのではなく、コーナーに合わせて重心を移動し、車体を傾けてコーナーを曲がるのである。重量のあるバイクと自分の身が一体となりコーナーを廻るときの気持ちよさは格別である。

東村有銘の給油所で給油を兼ねて休憩を取るのだが、目的は他にもある。週末は国頭村の高江あたりでネズミ捕りがあるのでその情報収集も兼ねているのだ。ハーレー乗りは制限速度はもちろん交通ルールには人一倍うるさいのだが、制限速度が40kmと極端に低く制限されているので注意深く運転しないとまずい。高江を過ぎると新川、安波と海が見えない景色が続く。緑が濃く所々で新芽が吹き出して、そのコントラストがとても美しく豊かな生命を感じながらバイクと一体となって自然の中をドッ、ドッ、ドッ、ドッとゆったりと走っていく。森の緑を左に右に青い海を眺めながら辺土岬に着く。週末の辺土岬はバイカーのメッカとなっている。辺土岬の駐車場に入っていくのだが、そのときは他のバイカーの視線を意識して出来るだけかっこよく入っていくようにする。エンジンの回転数をなるべく低速にして背筋をぴんと伸ばし、予定の位置でバイクが停止してから左の足をかかとから下ろすのである。

辺土岬に立って与論島を眺めていると、子供のころ一番上の兄たち（昭和22年生まれの子の同級生たち）と復帰運動で「♪～♪沖縄を返せ♪～♪」と歌った時代を思い出す。沖縄県は昭和47年に本土復帰を果たすのであるがそれまでは米国の統治であったため復帰運動が盛んで、年に1度辺土岬と与論島のチヂ崎で松明を燃やして復帰運動を盛り上げていた。



辺土岬では適度な休憩と給水を探り、昼食予定の辺土名へ向かう。「ゆいゆい国頭」を右手に見ながらオクマリリゾートに向かうと鏡地の「ひまわり食堂」が見えてくる。「ひまわり食堂」では「牛そば」を注文する。沖縄そばの上に牛肉もやし炒めをたっぷり載せたボリュームのある一品だ。しばらくすると店の奥から沖縄らしい顔立ちのふくよかなおばさんが「牛そば」を持ってくる。もやしのしゃきしゃき感と少し硬めの牛肉の歯ごたえを楽しんでいるとやっとならそばが顔を出してくる。沖縄そばの出汁と牛肉もやし炒めの出汁が混ざり、アジクーターで非常に旨い。ツーリングでの一番の楽しみのような感じだ。

そばを食いながらバイクのカスタムの話をし、かなりの時間をそば屋で過ごす。時計が午後3時半を示している。そろそろ帰宅の時間である。O先生が帰りのルートの相談を始め、塩屋から国道331号を通り東村経由し宜野座インターから自動車道に入って帰るルートに決まる。自動車道に入ると休憩はなく、それぞれが自宅に近いインターで解散する。O先生と私とK先生が西原インターで自動車道を出る。鉄馬を駆っての一日が終わるころには日常からの開放感と程よい疲労感から、なぜかビールが旨い。リフレッシュして明日から又、日常の仕事モードにギヤーチェンジだ！

